

巻頭言

近年、大学の役割は、それまでの教育、研究という 2 本の柱に加えて「地域・社会貢献、地域連携」ということが、大学の第 3 の柱と位置づけられるようになりました。看護研究交流センターは、県民の大学としてこの第 3 の柱を実現するための拠点となる付属機関です。

センターでは、平成 26 年度も 5 つの部門を置き、本学の建学の精神である「ゆうゆう・くらしづくり」に基づきそれぞれの部門の活動を展開してきました。看護サービスの質向上をめざした地域課題研究には 9 件の応募があり、本学の教員と連携して取り組んでいただきました。前年度の研究成果は、日本看護協会が主催する看護学会等でも報告され、同学会論文集に掲載されたという、大変うれしい報告も頂きました。このように、毎年、地域の看護職者が直面している課題を取り上げ、確実に実践の改善・充実につなげる研究に取り組んでいただいております。また、上越地域看護研究発表会には多くの看護職者がつどい、看護実践と研究成果の共有を図ることができました。この発表会は、上越の文化に根差した看護のあり方を考える貴重な場となっています。他にも、県内看護職者の生涯学習支援、県民の健康づくり支援として、本大学を会場に 26 回の公開講座を開催し、1800 人の方に参加していただきました。平成 26 年度は、“もっと身近なところへ”と、大学から地域へ出向く「出前講座」を開講しました。この講座には 36 件の依頼があり、1800 人の方が受講されました。このように、センターの活動をとおして、大学と地域はより緊密な関係になったと思われます。学内外の皆様のご支援に深く感謝したいと思います。

多様で複雑な課題を抱えるようになった現代の地域社会は、自らをどう再生するのか、どう活性化するのか、という困難な問題に直面しています。このようななか、アベノミクスの柱の一つは、「まち・ひと・しごと」を創生する地域再生です。少子高齢化がますます進展する中山間地域、豪雪地域では、誰もが健康で安心して暮らせるまちづくりを推進するために地域の健康力と福祉力を高めていかねばなりません。この取組は地域再生の根幹をなすとも言われています。地域再生の重要なキーワードは、人材育成です。センターの事業に参加された皆様には、“わたし”の幸せから、“みんな”の幸せにも関心を寄せていただき、地域を考え・支える人材として、本学の教育活動はもとより地域で行われている保健医療福祉活動の応援をしていただければ幸いです。

センターでは、教職員一同、本学の学生や卒業生、そして地域の皆様としっかりとした絆を結び合い、地域に役立つ資源のひとつとして対応していきたいと考えております。これからもご支援のほど、どうぞよろしく願いいたします。

平成 27 年 3 月
新潟県立看護大学
看護研究交流センター長
平澤 則子